



Title	唐の西北軍事支配と敦煌社会
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	唐代史研究. 2011, 14, p. 71-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79130
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

唐の西北軍事支配と敦煌社会

荒川 正晴

はじめに

今から 30 年前、菊池英夫氏は、唐沙州時代（7～8 世紀）の敦煌社会を論ずるにあたり、敦煌オアシスのローカル化に関する見解を公表された〔菊池 1980, pp.172-175〕。それは、当該時期、ここを通過する交通路がほとんど使用不能に近い閉塞状態であったため、敦煌は西域商胡の細々とした往来を保つ寂れたオアシスとなっていたのではないか、という指摘であった。とくに駅道ルートの変化により幹線路が敦煌を通過しなくなることが、これを決定的にしたと見る。

事実、唐の支配当初にあっては、唐の駅道は敦煌（沙州）を通過して伊州に到達するルート（稍竿道）と、敦煌を通過しないで瓜州から伊州へ北上するルート（莫賀延磧道）とが交互に利用されていたが（後掲地図参照）、やがて莫賀延磧道が駅道として固定化し、敦煌オアシスは公道たる駅道ルートからはずれた〔菊池 1980, p.175；荒川 2010, p.269〕。こうした駅道ルートの変化が、敦煌オアシスのローカル化を促進したと見なす。

この提言により、従来一般に懷かれてきた「華やかなシルクロード交易都市」という敦煌に対するイメージは、一掃された観がある。私も、この指摘に衝撃を受けた一人であるが、今あらためて考えてみるに、この時期、本当に敦煌はキャラヴァン隊があまり寄りつかない寂れたオアシスになったのだろうか？本報告は、唐支配下の敦煌社会を考える際に避けては通れない、この重要な提言を再考察するものである。

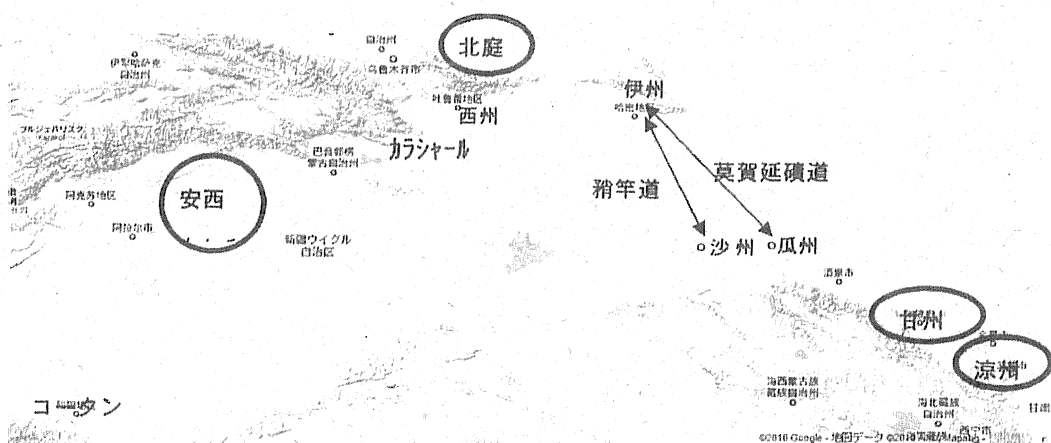
I. 軍鎮の駐留と屯田開拓

唐支配下の敦煌社会を議論しようとするとき、唐の支配がその社会に如何なる影響を与えたのかを正確にとらえる必要があるが、この点に関して何よりも注目すべきは、大規模な唐の駐留軍が敦煌オアシスに常置されたことであろう。敦煌には、豆盧（鮮卑語で「帰義」の意）軍と呼ばれる唐の軍鎮が置かれた。『元和郡県図志』巻 40、隴右道下（Cf.『唐会要』巻 78）によれば、「豆盧軍。沙州城内。以當匈奴要路、山川迴闊、神龍初(705 年)置、立豆盧軍以鎮之。管兵四千五百人、馬四百疋。」とあり、この軍が神龍初め（705 年）に沙州城内に設置されたことになっているが、大谷 2840 文書によれば、長安二（702）年より以前に置かれていたことが明かである

[内藤 1963, p.242]。その設置がどこまで遡れるかが大きな問題となるが、何れにしても東隣の瓜州に置かれた墨離軍とともに、7世紀に遡ることはまず疑いない¹。

また敦煌は、戸数が「開元戸 6,466、郷 13」(『元和郡県図志』巻 40、隴右道下)しかない小規模なオアシスであったが、そこに遅くとも8世紀の初頭には、4,500 人の兵員と 400 疋の軍馬(前掲『元和郡県図志』巻 40)が常駐することになったのである。このことから、兵士・軍馬へ支給する軍糧・飼料の確保が、豆盧軍にとって優先的に解決すべき大きな問題となっていたとみられる。

この状況は、言うまでもなく敦煌だけの問題ではなく、軍隊が常駐する他の河西・中央アジアのオアシスも同様であった。そのため、唐はこうした軍糧・飼料穀物の確保に向け、屯田の設置を積極的に推進した²。河西・中央アジアにおいては、涼州(36 屯)・甘州(46 屯)および北庭(20 屯)・安西(20 屯)の諸オアシスに大規模な屯田を開いている(『大唐六典』巻 7 屯田郎中の条)。たとえば、北庭〔都護府〕の屯田 20 屯の場合で見れば、1 屯=50 頃=5,000 畝であるので、北庭に開かれた 20 屯とは、 $20 \times 50 \text{ 頃} = 1,000 \text{ 頃} = 100,000 \text{ 畝}$ となる。これは、ちょうど西州(640 年時点)の全耕地が 900 頃と見積もられていた(『通典』巻 174、州郡 4、西州の条)、北庭地域に、トウルフানের全耕地以上の田地が新たに開拓されたことになる。



大規模な屯田が置かれたオアシス

敦煌オアシスは、大規模な屯田が置かれた上記オアシスとは異なり、本オアシス

¹ 墨離軍の設置時期については、拙論において、先行研究に拠りつつ、同軍が7世紀の早い段階で設置されていたことを指摘した。荒川 1989, pp.24-25。

² 唐代の屯田に関しては、営田の問題と併せて多くの論考が出されているが、唐代前期の西北方面に設置された屯田については、馬国榮 1990；李錦繡 1995, pp.683-693；齊陳駿 2005, pp.193-237などを参照。

に屯田が設置されたことを明示する記録は見あたらない。唐代敦煌の地誌である『沙州図経』にも、「監牧」・「羈縻州」などの諸項と並べて「屯田」を挙げ、これらが「右は、當縣（敦煌縣）、並びに前件の色無し」と明記されている（P.2005, 『釈録』1, p.17）。ただし沙州でも敦煌県管外では、同県西南に位置する寿昌県管内と見られる「子亭鎮」に屯田が置かれたとする説が提示されているが〔斉陳駿 2005, p.203〕、これを積極的に裏付ける証拠は残念ながら今のところない。

II. 豆盧軍による二種の穀物買い上げ

では、こうした敦煌のように、大きな屯田を開くことのできないオアシスでは、どのようにして軍糧・飼料を確保していたかと言うと、駐留する軍隊なりそれを置いた州司が穀物を買上げるとする方法（糴買）により、この問題を解決しようとした。

以下に掲げる史料1（P. 3348 v）は、敦煌の軍鎮である豆盧軍が、天宝3載～4載にかけて軍糧・飼料を確保するために施行した穀物買い上げの会計報告書となっており、紙の貼り継ぎの裏面には何れも「豆盧軍之印」が捺されている。少し長くなるが、ここで本論に関係する部分を改めて引用しておきたい。

（史料1）「唐 天寶四（745）載河西豆盧軍和糴・交糴会計報告文書」（P. 3348v 〈録〉『籍帳』No. 211B, pp. 463-466; 『釈録』1, pp. 426-434）

【1. 交糴会計報告】

【天宝三載夏季、交糴分】（前略）

- 1 壹萬肆拾肆碩陸勝柒合，斛斗。准和衆估，
- 2 折填充交衆正段本。其斛斗收附軍倉，三
- 3 載夏季載支糧帳訖。
- 4 肆伯伍拾陸碩捌斗伍勝柒合，小麦。
- 5 壹伯肆拾柒碩肆斗，青麦。
- 6 壹伯碩肆斗，豌豆。
- 7 玖阡參伯陸碩肆斗壹勝，粟。
- 8 壹阡壹伯壹拾陸碩捌合，粟，填本外
- 9 利潤，其粟收附，同前季利潤帳
- 10 訖。

【天宝三載冬季、交糴分】

- 11 伍阡柒伯玖拾壹碩貳斗肆勝肆合，斛斗。
- 12 三載冬季交衆納，准估計當

- 13 錢壹阡伍伯柒拾伍貫玖伯五文。
 14 伍阡肆伯伍碩捌斗參勝柒合，粟，斗估廿七文
 15 計壹阡肆伯伍拾玖貫伍伯柒拾陸文。
 16 壹拾柒碩壹斗，床，斗估廿七文，計肆貫
 17 陸伯壹拾柒文。
 18 貳伯陸拾貳碩伍斗，青麥，斗估卅文。
 19 計柒拾捌貫柒伯伍拾文。
 20 柒拾陸碩柒合，小麥斗估卅二文，計貳拾
 21 肆貫參伯貳拾參文伍分。
 22 貳拾玖碩捌斗，豌豆，斗估廿九文，計捌貫
 23 陸伯肆拾貳文。
 24 肆阡捌伯捌拾陸碩參斗伍勝伍合，麥
 25 粟床豆等，准和衆估，折填充
 26 交衆正段本，其斛斗，收附軍
 27 倉，同前載冬季載支糧帳訖
 28 壹拾柒碩壹斗，床。
 29 貳伯陸拾貳碩伍斗，青麥。
 30 柒拾陸碩柒合，小麥。
 31 貳拾玖碩捌斗，豌豆。
 32 肆阡伍伯碩玖斗捌勝捌合，粟。
 33 玖伯肆碩捌斗捌勝玖合，粟。填本外
 34 利潤，其粟收附同前季利潤帳訖。

【天寶四載春季、交糴分】

- 35 柒阡伍伯陸拾陸碩肆斗柒勝肆合，
 36 斛斗。四載春季交衆納，准估
 37 計當錢貳阡陸拾貳貫參伯
 38 壹拾柒文貳分。

(後 略)

〔Ⅱ. 和糴會計報告〕

- 1 「□□. 廿日. 」
 2 合當軍天寶四載和衆，准 旨支貳萬段，出武
 3 威郡，准估折請得絕絹練綿等，惣壹萬
 4 肆阡陸伯柒拾捌屯正參丈伍尺肆寸壹拾銖。
 5 伍阡陸伯正，大生絹
 6 伍伯伍拾正，河南府絕

- 7 貳伯柒拾疋，縵緋
- 8 貳伯柒拾疋，縵綠
- 9 壹阡玖伯貳拾柒屯壹拾銖，大綿
- 10 壹阡柒伯疋，陝郡絁
- 11 肆阡參伯陸拾壹疋參丈伍尺肆寸，大練
- 12 柒阡壹拾柒屯疋壹拾銖，行綱燉煌郡
- 13 參軍武少鸞，天寶三載十
- 14 月十二日，充 旨支四載和
- 15 余壹萬段數。其物並給百
- 16 姓等和余直，破用並盡。
- (中 略)
- 27 以前疋段，准估都計當錢參阡貳伯陸
- 28 拾陸貫柒伯伍拾玖文，計余得斛
- 29 壹萬壹伯壹拾伍碩陸斗玖勝壹合。
- 30 其斛，收附去載冬季軍倉載支
- 31 粮帳，經支度勾，并牒上金部・比部・
- 32 度支訖。
- 33 玖阡貳伯肆拾柒碩柒勝肆合、粟、斗估卅二文
- 34 計貳阡玖伯伍拾玖貫陸拾肆文肆分。
- 35 肆伯壹拾柒碩參斗伍勝參合、小麦
- 36 斗估卅七文、計壹伯伍拾肆貫肆伯
- 37 貳拾文陸分。
- 38 壹伯參拾玖碩貳斗陸勝肆合、床、斗估卅二文
- 39 計錢肆拾肆貫伍伯陸拾伍文貳分。
- 40 肆拾玖碩伍斗、豌豆、斗估卅四文、計錢壹
- 41 拾陸貫捌伯參拾文。
- 42 貳伯陸拾貳碩伍斗、青麦、斗估卅五文
- 43 計錢玖拾壹貫捌伯柒拾伍文。
- 44 柒阡陸伯陸拾壹屯疋參丈伍尺肆寸疋段。
- 45 行綱別將張處廉、三月十八日於武威
- 46 郡領到、充 旨支四載和
- 47 余壹萬段數。春季新附、其
- 48 疋給百姓和余斛。并准金部
- 49 格、給副使祿直、破用並盡。
- (後 略)

本文書については、那波利貞氏が初めてこれを紹介して以来[那波 1952, pp.12-27]、私を含め多くの研究者によって取り上げられてきた。とりわけ注目されるのは、本文書により、豆盧軍では、和糴と交糴と呼ばれる二様の穀物買い上げを施行していたことが分かることである。この事実を明確に指摘したのが荒川 1982 [荒川 2010, pp.493-505] であり、会計報告Ⅰが交糴に関するもの、続く会計報告Ⅱが和糴に関する

るものとなっている。その後も、和糴・交糴については、王永興 1990; 盧向前 1990; 楊際平 1992; 李錦繡 1995, pp. 747-753 などの研究者によって検討されてきたが、この二様の穀物買上を施行する背景分析に関して言えば、荒川 1982 の考察をさほど進めるものとはなっていない。そこであらためて、この問題について検討を深めておきたい。

まず上掲史料から、この二つの糴買の施行時期と買い上げ額を見てみると、以下に挙げた一覧表のように、まとめることができる。

豆盧軍による交糴・和糴施行時期と糴穀量(天宝三載夏～四載春)

糴買総額 33,389 石

交糴 (総計24,517石)	和糴 (総計20,142石)
(天宝)三載夏季 11,160石	
(天宝)三載冬季 5,791石	(天宝)三載冬季(十月) 10,115石(実質和糴額5,229石)
(天宝)四載春季 7,566石	(天宝)四載春季(三月) 10,027石(実質和糴額3,643石)

表の冒頭に示したように、敦煌オアシスにおいて豆盧軍は、天宝三載の夏～四載の春にかけて軍糧・飼料として、総計 33,389 石を買い上げており、その内訳は、交糴による穀物分が 24,517 石であり、和糴によるそれが 20,142 石であった。ここで総計額と交糴・和糴の合計額が食い違うのは、和糴による買い上げ穀物額の 20,142 石が帳簿上の額面であり、実際に豆盧軍が和糴で買い上げていたのが 8,872 石であったと推定されることによる。天宝三載の夏～四載の春にかけて、豆盧軍が買い上げた穀物総額を 33,389 石とする所以であるが、この点については、後であらためて説明する。

また豆盧軍による穀物買い上げが、夏・冬・春季にわたっているものの、敦煌の主要作物であるアワが収穫される秋季には行われていないことにも留意する必要があるが、これについても、後で触れたい。

さて上掲一覧表を見てすぐ気付くように、豆盧軍が何故に同じような時期に、わざわざ和糴と交糴に分けて糴買する必要があったのか大きな問題となるであろう。まずは両者の相違を明らかにするために、唐代史料に頻見する和糴とは違い、本文書でしかその名が見えない交糴がどのような糴買であったのか、以下に検討してゆくことにする。

Ⅲ. 豆盧軍による穀物交易の誘導

交糴の大きな特徴として注目されるのは、糴買価格が低額に設定されていることである。既に指摘したように [荒川 1982 (荒川 2010, pp.496-497)], [史料 1] から、

交糶は和糶に比して、穀物の種類を問わず、買い上げ価格を1斗あたり5文、一律に安く抑えて設定していたことが分かる。それを表で示すと、以下の如くである。

交糶・和糶買い上げ価格

穀物の種類	交糶の斗価	和糶の斗価
粟	27文	32文
小麦	32文	37文
床	27文	32文
豌豆	29文	34文
青麦	30文	35文

次に同じく P. 3348 v には、交糶に応じた者が豆盧軍宛に提出した牒が残されており、ここから13人の交糶応募者を具体的に知ることができる。その一部を掲げると以下の通りである。

(史料2)「唐天寶六載(747)十一月河西豆盧軍軍倉收納糶粟牒」(P. 3348 v 〈録〉『籍帳』No.213,pp.467-472;『釈録』1,pp.435-444)

(前 略)

- 1 粟伍拾碩。
- 2 牒、欽明有上件粟。今交衆次、請處分。
- 3 謹牒。
- 4 天寶六載十二月 日、百姓張欽明牒。
- 5 「付 判、元 感 示。
- 6 十七日。」
- 7 十二月十七日、典鄧儻
- 8 孔目判官「(押)」付
- 9 「連、暉 白。
- 10 十八日。」

..... (縫背署「暉」)

- 1 粟柒拾碩。 小麦參拾碩。
- 2 牒、重進今有前件斛斛、請充交衆。謹牒。
- 3 天寶六載十二月 日、行客常重進牒。
- 4 「付 倉 檢 納、元 感

5 示。 十四日。」

.....「元」.....

1 粟壹伯碩。

2 牒、庭訓今有前件斛斗、請充交瀘。謹牒。

3 天寶六載十二月 日、兵客曹庭訓牒。

4 「付 倉 檢 納、 元 感

5 示。 十四日。」

.....「元」.....

1 右重進等、各請上件交余斛斗、望請預付正段。

2 其斛斗、限日填納。謹連判狀如前、請處分。

3 牒、件狀如前、謹牒。

4 天寶六載十二月 日 行客常重進等牒。

5 行客曹庭訓

6 「付 判 准 狀、元 感

7 示。 十七日。」

8 十二月十七日、典鄧儁

9 孔目判官「(押)」付

10 「連、暉 白。

11 十八日。」

(後 略)

史料2を検討された池田温氏により既に指摘されているように〔池田 1980, pp.324-325〕、この交羅には百姓とともに行客が応募しており、しかも行客がその多くを占めていたことが知られる。具体的には、13人の交羅応募者の内訳は、行客9名と百姓4名(百姓は、張・宋・汜・董の諸氏)であった。とくに注目されるのは、百姓を含め彼らの一人当たりの納入穀物量が大いことである。だいたい一人あたり、50-200石におよんでいた。

大半を占める行客については、これが本籍を離れた客籍民であり、多くは東西を往来して商業活動に従事するものたちであったことが指摘されている〔姜伯勤 1989, pp. 277-290〕³。交羅に応じた行客9名のなかに、康仁希のようなソグド人⁴が含まれ

³ 敦煌においても、行客による奴婢交易が行われていた〔「唐年次未詳〔天宝・至徳間(744-58)〕行客王修智売胡奴市券公驗」敦煌研究院所蔵／『籍帳』p.490; TTDⅢ, pp.79-80〕。

⁴ あるいは曹庭訓もソグド人であった可能性は十分にある。なお康仁希のサイン(押)は朱で書かれており、しかも文字は一見漢字ではないように見えることもあり、これがソグド文字の可能性もある。

ていたのも頷けよう。

またこの交糴に応じていた百姓は、池田氏が指摘するように、その百姓の姓（張・宋・汜）が、敦煌の在地有力豪族と同姓であり、しかもその納穀糧の大きさからも、彼らは沙州の百姓のなかでも有力者であったと見られる⁵。彼らが沙州の百姓であったという点については、彼らの肩書きに公文書であれば通常明記される所属州県名が省略されており、彼らが豆盧軍の置かれた沙州の百姓であったことを明示していることから傍証されよう。

以上に挙げたような特徴が豆盧軍の交糴に見られるが、そもそも和糴とその名を異ならせた穀物買い上げである交糴の名称は、穀物生産が豊かで穀価が低廉な地における、「商賈」による穀物の買い上げと密接に関わっていたと見られる。というのも、時代は降ってしまうが清代に編まれた『皇朝文献通考』巻36、市糴考5、糴に、穀物買い上げ（糴買）が穀物価格を平準化する手段となってきたことに触れるなかで、この交糴という表現が見えているからである。この記事によれば、糴買には官による穀物買い上げと民によるそれとがあり、後者の糴買の効用として「豊熟之郷、商賈交糴、以起太賤之価、災歉之区、舟車輻輳、以压太貴之直」と説明する。和糴に対して交糴という名の穀物買い上げが、軍・官により行われていたことを直接示すものではないが、穀物生産が豊かな地において商賈が穀物交易をすることを「交糴」と呼んでおり、それが穀物豊穰な地の低廉な穀価を押し上げ、反対に災害などにより穀価が高騰している地では、それを押し下げていることが記されているのである。残念ながら、今のところ同時代、さらには後の宋代に降っても、この交糴という名称の穀物買い上げを記した編纂史料を探し当てられていないが⁶、前掲記事は十分参考に値するものと言えよう。

実際、河西オアシスでも、穀物生産が豊かな地における「商賈」の交易により、穀物が流通していたことは、『河西節度使判集』（P.2942）からもうかがえる。本史料は、全228行におよぶ47項目および不完全の1項目からなる河西節度使の下で処理された事件の判辞書で、ここには甘州・肅州・瓜州・沙州が登場し、建康軍・豆盧軍など軍鎮の軍糧支弁などを論じている。菊池英夫氏によれば、この判が書かれ

ることが指摘されている。池田1980, p.340注(94)。ただしソグド語の専門家である吉田豊氏によれば、これはソグド文字ではないと断ずる。

⁵ 池田温氏は、これらの百姓は「一般農民ではなく、少なくとも一頃以上を経営する有力農民でなければならない」と指摘する。池田1980, p.325。ただし百姓と言っても、農民であったと決めつけることはできない。

⁶ 宋・眞德秀撰『西山文集』巻6、対越甲藁、奏申に載せられる「奏乞分州措置荒政等事」のなかに「交糴」という表現が見えるが、これは商賈による穀物買い上げとは関係がなく、単に官による「市糴」を意味しているように解しうる。

た下限は永泰元年（765）であり、この時期、河西節度使（節度使は沙陁に殺された楊志烈）は、涼州陥落後、甘州に寄治していた〔菊池 1980, pp.182-183〕。こうした判辞の一つに、次に掲げるものがある。

（史料 3）「河西節度使判集」（P. 2942 <録>『籍帳』No. 236, p. 494; <写>『釈録』2, p. 620）

広徳 2（764）年頃〔菊池 1980, p. 183〕

- 1 肅州請閉糴不許，甘州交易。
- 2 隣徳不孤，大義斯在。邊城克守，小利須通。豈唯甘・肅比
- 3 州，抑亦人煙接武。見危自可奔救，閉糴豈曰能賢。商賈
- 4 往來，請無壅塞。粟麥交易，自合通流。准狀。仍勝軍州，
- 5 切勒捉搦。少有寬許，當按刑書。

肅州が閉糴（商賈らによる穀物買い上げの禁止）⁷の不許可と、甘州との交易を請う（件）
「（前略）甘州と肅州は、ただ単に隣りどうしの州というばかりでなく、人家も相連接している。（それなので）危難に直面したら、（互いに）救けに駆けつけるべきであり、閉糴は賢い方法とは言えない。商賈の往來は、妨げないようにすることを求めおく。粟麥を交易させ、その流通をはかるべきである。（この処決）内容に従え。なお軍州に勝して、厳格に取り締り（違法者などを）取り押さえよ。（後略）」

先にも述べたように唐の支配期をほぼ通じて、甘州には大きな屯田が設置されており、豊かな穀物生産地となっていた。河西における穀倉オアシスとして、同地域の軍糧・飼料供給を支えていたと見られる。ここでは唐の河西支配末期における危機的状態のなか、甘州での商人による穀物買い上げを禁止しようとしたことがうかがえる。

垂拱初年（685）の陳子昂の視察報告を見ても、甘州屯田については、「瓜肅以西、皆な其の饋（食糧、食物）を仰ぐ」状態になっていたことを伝えている。このことから、大規模な屯田が設置された穀倉オアシス（甘州）で、商賈などが買い付けた廉価な穀物が、「瓜肅以西」すなわち瓜州・肅州以西の敦煌へも多く流入していたことが予想できる。このほか、河西地域ではないが、北庭という大屯田地を北に抱えるトウルフアンでも、北庭産の麵（ムギコ）が次のような価格で売られていた。

（史料 4）「交河郡市估案」（大谷 3072 <録>『籍帳』No. 210, p. 447, 『集成』2, p. 16;

⁷ 唐代の閉糴については、日野 1982, pp.264-271 を参照。

1 米麵行

2 白麵壹斛 上直錢參拾捌文 次參拾柒文 下參拾陸文

(次)

3 北庭麵壹斛 上直錢參拾伍文 [

本文書によれば、トゥルフアンに置かれていた「市」内の「米麵行」では、トゥルフアン産と思われる白麵の方より、外来の北庭産の麵の方が1斗当たり3文も安く売られていたことが知られる。これは、本文書を詳細に分析された池田氏が指摘しているように〔池田 1968 (二), pp. 49, 54 注 (3)〕, たとえ品質の差があるとしても、当時の穀物輸送がかなり効率的であったことを示すとともに、北庭が大きな屯田地でかなりその生産に余裕があり、それが商賈などの手によってトゥルフアンに流入していたことを示すものであろう。甘州屯田も、その余剰穀物を河西の西方部に流す役割を果たしていたと見られる。

唐の支配時期、屯田設置による穀倉オアシスが河西・中央アジアに成立し、奢侈品の交易とは異なる、穀物を取引対象にした交易が、穀倉オアシスと周辺の糴買施行オアシスとの間で活発化していたのである。

こうした交易が活発化するなか、豆盧軍が施行した交糴とは、一体、どのような穀物買い上げとなっていたと考えるべきか。やはり行客がその大半を占めるということからも、基本的には、交易目的で甘州において買い付けた廉価な穀物が、豆盧軍施行の交糴における主要対象の穀物であったと考えられよう。

しかも見逃せないのは、〔史料 2〕(行客常重進等の牒)に挙げたように、豆盧軍により行客に対して買い上げ金(絹綿)の先払いが行われ、穀物の後納を許していたケースがあることである。このことは、単に商賈が穀物をもたらすばかりでなく、駐留軍が行客に資金を貸し付けて、穀物を確保させていた側面を認めることができよう。さらには、行客ではない地元の有力百姓たちも、駐留軍と提携していた可能性は高い。というのも、唐代において行客だけでなく百姓が戸籍に附けられた州の外へ遠く出るためには、過所と呼ばれる通行証が必要であったが、その取得はきわめて厳しい審査を伴うものであり、散官を持たない一般の白丁百姓などは、特別な事情を除き、過所を請求することすらできなかったと見られるからである〔荒川 2010, p. 511〕。軍による糴買への応募は、そうした過所取得の絶好の機会を百姓に提供するものとなっていたと見られる。実際、糴買に応じるために、穀倉オアシスから糴買施行オアシスへ穀物を運搬していた百姓が、州(郡)が発給する過所によってその

移動を保証されていたことが、後掲の史料5からうかがえる。また中央アジアにおいては、過所の取得は、そのままキャラヴァン隊を組織・派遣する権利を与えられることであったことも重要なポイントとなる[荒川 2010, p.506]。このことは、行客ばかりでなく百姓にとっても、豆盧軍（沙州[敦煌郡]）と提携するうえでの大きなメリットとなろう⁸。

すなわち、豆盧軍の交糴には、単に行客に甘州で買い付けさせた穀物を対象としただけでなく、地元の有力百姓らに豆盧軍（沙州[敦煌郡]）が過所を保証して、彼らに甘州で穀物を買わせていたものも含まれていたと見られる。このことは、豆盧軍（沙州[敦煌郡]）と行客および地元オアシスの百姓が提携し、穀物買い上げのキャラヴァン隊を派遣していたことを示唆している。しかも、沙州の収穫期である秋季以外の諸季節ごとに交糴が施行されていたことから、ほぼ一年を通じて、こうした穀物買い付けキャラヴァン隊が、定期的に沙州敦煌から甘州へ派遣されていた可能性は高い。その結果、穀倉オアシスである甘州から糴買施行オアシスである沙州に向けた穀物の流れが組織立てられていったと考えられる。これは、何も甘州と沙州だけに限る必要はなく、当該時期、広く中央アジア・河西にできた穀倉オアシスと糴買施行オアシスとの間でも見られたものであろう。

IV. 二つの糴買施行とその性格の相違

百姓や行客を通じて豆盧軍が買い上げた穀物は、すべて一旦、軍倉へ納められたが、交糴穀物については、[史料1、I. 交糴会計報告の3・9・27・34行目]から分かるように、二つの帳簿に分けて会計処理された。一つは「支糧帳」であり、もう一つは「利潤帳」である。これらは、それぞれ以下のような内容の穀物を登載している。

- (i) 「支糧帳」→ 軍が買い上げた穀物の帳簿。ただし、すべては和糴価格で買い上げた穀物であることが前提となる。交糴価格で買い上げた穀物も、和糴による買い上げとみなし、帳簿への穀物登載にあたっては、交糴買い上げ穀物を和糴価格で換算し直すことになる。
- (ii) 「利潤帳」→ 交糴で買い上げた穀物量から、(i)の額を差し引いた穀物量を登載。

⁸ 沙州（敦煌郡）のように、軍鎮が置かれた前線の州（郡）にあっては、州県の官が軍の官を兼任することが多い。Cf. 内藤 1963, pp.242-243. 前掲史料1の「II. 和糴会計報告」にも見えるように、豆盧軍の和糴用絹帛を受け取りに行ったのは、敦煌郡の参軍であった。前線において軍司と州（郡）司は明確に分けがたく、一体化してその機能を果たしていたと言えよう。

このうち、(i)は国家財物を支出し施行した和糴分として、支度使の監査を経て、金部・度支・比部へ報告することになっていた〔史料1、Ⅱ.和糴会計報告の30-32行目〕。つまり交糴で買い上げた穀物は、あくまでも建前では、和糴として買い上げたものであった。これに対して、(ii)は支度使による監査を受けた形跡は認められない。それは、軍鎮と商利を求める行客・百姓との交易取引として、和糴穀物以外に、交糴により獲得した利潤的穀物分として処理されていたことによる。この穀物を載せる帳簿を「利潤帳」と呼ぶ所以である。

こうした交糴だけでなく、先に指摘したように、豆盧軍では同じような時期に、和糴も併せて施行していた。豆盧軍による和糴施行については、現時点で詳しく検討できる史料はないが、和糴については、豆盧軍が置かれた沙州(敦煌郡)も施行しており、それを参考にして豆盧軍のそれを考えることができよう。

その沙州(敦煌郡)による和糴であるが、「唐天宝九(750)載八月～九月敦煌郡倉納穀狀」(P.2803 v 〈録〉『籍帳』No.215, pp.472-477; 『釈録』1, pp.445-462)が、その実態を伝えている。これによると、沙州(敦煌郡)の和糴は秋季に施行されていたことが知られる(後掲「敦煌郡百姓和糴納入一覧表」を参照)。豆盧軍による穀物買い上げは、四季のうち秋季だけその施行を避けていたようなので、収穫期である秋季は、沙州(敦煌郡)の和糴のみが実施されていたことになる。この背景としては、収穫時期に廉価な穀物が外から大量に入ってきてしまうと、穀物の価格を大きく下げてしまうことが先ずは考えられよう。とくに秋季は和糴価格が決定され、それが一年を通して修正されない事情もある〔荒川1982(荒川2010, pp.498-499)〕。

また前掲文書によると、この州(郡)による和糴は、沙州の百姓を対象として、地元オアシス産の穀物の買い上げが中心となっていたことがうかがえる。買い上げに際しては、先に挙げた和糴買い上げ価格に基づいたと見られ、一人当たりの納入額は一部の例外を除き小規模であるが、交糴より高額で買い取りが行われたことがわかる。ちなみに豆盧軍の交糴穀物が軍倉に納められたのに対して、州(郡)による和糴穀物は、州(郡)倉へ収納されていたことも前掲文書より確認できる。

以上のことから和糴は、交糴とは異なり、行客は関わることができず、地元産の穀物の買い上げが主体となっていたのではないかと見られる。ただし、後に検討する史料5にあるように、伊州(ハミ)の和糴に応ずるために、穀倉オアシスである北庭から、廉価な穀物をもって伊州オアシスに来ていた百姓もあった。これについては、後に検討するように、これが軍の高官が関与する和糴応募の例であること、また伊州オアシスの戸口数は、敦煌オアシスと比べても規模がきわめて小さく〔開元戸数1,729; 天宝戸数2,467/ 口数10,157、郷数7 cf. 菊池1980, p.167〕、地元の百

姓が産出する穀物の量がかなり限られたものであったことも考慮すべきであろう。

なお、こうした穀物買い上げを通して、現地敦煌オアシスにおける穀物栽培が促進される一方で、これにより敦煌オアシスにおいて織布生産が後回しにされたことが、トゥルファン出土の敦煌文書よりうかがえる（大谷 2836 文書）。唐帝国に続くチベット支配期の敦煌において、錢貨の姿が消え、穀類が流通の媒体として際立っているのも、敦煌が「錢貨を欠く経済に退化した」と見るよりも〔池田 1980, pp.316-319〕、むしろ唐支配期におけるオアシス間の穀物流通の盛行を引き継いだ部分があったと見るべきであろう。

結局、一年を通じて、豆盧軍および州の穀物買い上げが行われており、以下のよう
に、それぞれの買い上げの特徴と季節ごとの施行状況をまとめることができよう。

軍による穀物買い上げ（軍糧・飼料の確保）・・・穀倉オアシス産の穀物／交糴で対応

→「行客」と敦煌オアシスの有力「百姓」による穀物交易（冬・春・夏季）

・・・敦煌オアシス産の穀物／和糴で対応（冬・春季）

州（郡）による穀物買い上げ（駅館・俸禄費用の確保）・・・敦煌オアシス産の穀物／和糴で対応（秋季）

※8・9 月（沙州の和糴）→10 月（豆盧軍の和糴）→11・12 月（豆盧軍の交糴）→1・3 月（豆盧軍の交糴・和糴）→4・6 月（豆盧軍の交糴）

これを見ても分かるように、豆盧軍が主体となって、1 年を通して季節毎に穀物買い上げをしていたことがわかる。

以上に検討してきたように、唐の支配時期、河西・中央アジア地域において、大規模な屯田がいくつかのオアシスを中心にして設置されるようになると、そこでの穀物生産の規模が大きくなるとともに、廉価な穀物が出回るようになるが、そうした穀物が商人らによる買い付けを通じて、周辺のオアシスに自然と流れこむようになったと推測できる。豆盧軍での利潤的な穀物確保を目指す交糴の施行も、まさに、こうした背景のもとに出現したものである。さらには、豆盧軍と行客や百姓との提携による穀物買い付けのためのキャラヴァン隊派遣さえも行われていたと推測される。

これに対して、和糴はあくまでも、唐中央の施策・支配理念に基づく公的な穀物買い上げであり、地元で生産される穀物の買い上げを基本としたものと見られる。そもそも官による穀物買い上げは、和糴しか想定されておらず、そのために交糴も名目的には和糴として行われた前提で会計帳簿が作成されており、それ故にそれだけが唐中央の会計監査を受けることになっていたのである。交糴は、後の宋代に展

開する商人を巻き込んだ様々な糴買の走りとも言えよう。

V. 敦煌オアシスと交易活動

(1) 潤沢な資金流通と軍鎮

既に検討したように〔荒川 2010, pp.448-455〕、常駐する軍鎮には毎年、莫大な資金（絹綿）が振り向けられたが、それらの財源となったのが、唐内地諸州で徴収された庸調であった。『通典』巻6 食貨6 賦税下には、玄宗期における度支の年間の経常収支統計（歳計）が載せられているが、それによると、穀物買い上げのための資金だけでも、毎年、河西・中央アジア方面（河西節度使と天山東部の伊西・北庭節度使および安西節度使）に向けて、100万疋端屯の絹綿が支出されていたことが知られる⁹。さきほど見たように、屯田設置による穀倉オアシスの成立にともない、これまでの奢侈品交易とは異なる、穀物を商品にした交易が、河西・中央アジアにおいて穀倉オアシスと糴買施行オアシスとの間で大規模に展開していたが、この盛行を支えた背景には、こうした莫大な糴買用に用意された絹綿が連年支出されていたことがあった。

さらに、兵士の給与（兵賜）・駅館維持費などのために、同方面に向けて、190万疋端屯の絹綿が支出されており¹⁰、両者を合わせると、河西節度使と天山東部の伊西・北庭節度使および安西節度使だけでも、年間で290万疋端屯を支出していたことになる。

唐内地から送られた、こうした膨大な絹綿は、一旦涼州都督府にストックされたため、この資金をさらに現地に運ぶだけでも大変な労力を要したが、〔史料1〕（Ⅱ、和糴会計報告の12-13行目、45-46行目）に見えるように、それは各軍鎮がキャラヴァン隊（行綱）を派遣し、もらい受けに行くことになっていた。

また穀物のほかにも、鋼・鉄の獲得のためにキャラヴァン隊が組まれていたことが知られている（cf. Pelliot Chinois 114〈録〉Trombert 2000, p. 99; 〈写〉Trombert 2000, pl. 114.）。詳細は不明ながら、軍物の交易・輸送に関わり、キャラヴァン隊（行綱）が編成されていたことがうかがえ、そこにも各オアシスの百姓や行客との連携が存在していたことが想像される。

このように軍鎮が河西・中央アジアのオアシスに常駐化するなか、軍糧をはじめとする軍需物資の交易・輸送が日常化してゆく様子が垣間見えてくるが、このこと

⁹ 『通典』には「朔方・河西各八十万，隴右百万，伊西・北庭八万，安西十二万，河東節度及群牧使各四十万。」とある。

¹⁰ 『通典』には「朔方百二十万，隴右百五十万，河西百万，伊西・北庭四十万，安西五十万，河東節度四十万，群牧二十万。」とある。

は、従来の奢侈品の取引を中心にした交易とは異なる、軍需に起因する供軍物資の交易を活発化させた。このことが、唐の支配時期における河西・中央アジアに、交易の網をより密にさせる状況を作り出していったと推測される。

(2) 駐留軍の軍官による交易活動の自己展開

オアシスに常駐する軍鎮ばかりでなく、軍鎮内の軍官それぞれについても、交易活動を自己展開していた状況も認められる。

まず注目されるのは、[史料2] (P. 3348 v) に見える曹庭訓の例のように、交羅に応じていた行客のなかに、行客と呼ばれると同時に、兵客の肩書きをもつものがあることである。先に述べた「先に帛練を受け取り、日を限って後で穀物を軍倉に納入」することを請求したのが、この曹庭訓であった。

池田温氏は「兵客とは、行客のうち武官・衛官など軍人の身分を有するものと解される」(池田 1980, p.325) と指摘しているが、そもそも行客で、軍官に就いていたものは少なくない。例えば、押隊官に就任する行客の例(有鄰館文書 40 号)が知られている。押隊官もしくは押(隊)官とは、下記、軍鎮組織概図に示すように、一団(4 隊(200 人))を率いたリーダーであったと見られる[Cf. 「唐 開元三(715)年西州當典李道上隴西県牒為通當當請馬料姓名事」(68TAM108:19(a) ほか <録>『文書』8, pp. 38-51; <写>『図文』4, pp. 17-24)]¹¹。

5000人	1000人	200人	50人	10人
・軍(大)使	副使	総管	子総管(子將)	押隊官
(僱人・別奏)	(僱人・別奏)	(僱人・別奏)	(僱人・別奏)	(僱人)
				隊頭
				火長

また子総管以上の軍高官も、交易活動をしていたことが、次に掲げる文書史料からうかがえる。

(史料5)「唐 開元二十一(733)年西州都督府案卷爲勘給過所事」(73TAM509:8/8(a), 8/16(a), 8/14(a), 8/21(a), 8/15(a) <録>『文書』9, pp. 61-62, 程喜霖 2000, p. 67; <写>『図文』4, p. 291, 「簡報」B, p. 22・図 19)

(前 略)

101

蒋化明年 廿六

¹¹ 『大唐六典』巻5 兵部郎中の条に「凡諸軍鎮、每五百人、置押官一人」とあり、押(隊)官が500人を統率していたようにも見えるが、ここでは文書史料から推測した。その正否は、今後の検討に委ねたい。

102 化明辯，被問先是何州縣人，得共郭林駟驢，仰答。但化明
103 先是京兆府雲陽縣嵯峨鄉人，從涼府与敦元諫駟駟至北庭。括
104 客，乃即附戸為金滿縣百姓。為飢貧，与郭林駟驢伊州納和余。
人

105 正月十七日，到西州主曹才本家停。十八日欲發，遂即權奴子盜化明
106 過所將走。（後略）

（和訳）

蔣化明 年 二六歳

蔣化明が弁明申しあげます。私がもと何州の何県出身であり、（どのような経緯で）
郭林のために驢を逐ってきたのか、尋問をお受けいたしましたので、仰ぎてお答えいた
します。およそ、私化明は、もと京兆府・雲陽県・嵯峨郷出身で、涼州都督府より敦
元諫とともに荷駟を運搬して、北庭にやってまいりました。（ところが、この北庭の地で）
客戸の検括にあい、寄寓地の戸籍に附せられて金満県の百姓となりました。（その後）貧
窮のために、（北庭の子総管〔子將〕である）郭林のために、（郭林に雇われて）驢を逐つ
て和糴用の穀物を伊州へ納めにまいりました。正月十七日に、西州の「主人」である曹
才本の家に到り停泊し、翌十八日に出発しようとしたところ、あつという間に權奴子が
（蔣）化明の過所を盗んで持ち去ってしまいました。（後略）

本文書は、過所を紛失した蔣化明が、西州で取り調べられた際に作成された彼の
弁明書の一部である。その弁明内容から、百姓である蔣化明は、北庭の子総管（子將）
により雇傭され、過所を携帯して伊州（もしくは伊吾軍）の和糴に応じていたことが
知られる。穀倉オアシスに駐留する軍鎮の高官が、周辺のアアシスにおける穀物買
上の機会を捉えては積極的にそれに応募し蓄財していた様相がうかがえよう。

さらには、子総管以上の軍高官には、『大唐六典』巻5 兵部郎中の条に「凡諸軍・
鎮大使・副使已下，皆有僉人・別奏，以為之使。（中略）所鋪僉・奏，皆令自召以
充。」とあるように、従者として別奏と僉人を召し抱えることができた。これらは、
軍鎮の高官が自ら召し抱えたもので、彼らは仕える主人のために使いに派遣されて
いたと見られる。

とりわけ、別奏には多くのソグド人が就いていたことが認められる。「唐副使康雲
漢殘文書」（Or.8212-1557 Mr.tagh 092 <録>郭 1993,p. 51; 『斯坦因』p. 503.）に見える
別奏の康雲漢 wnx'n は、こうしたソグド人の1人であるが、彼は軍物輸送隊の組織
と統括を担当していたと考えられる。彼らが軍高官の従者として、このように輸送
業務に従事していたことは不思議なことではないが、とくに「唐 開元二十一年（733）
西州都督府 岸頭府界都遊弈所状」（<録>『文書』9, pp. 68-69, 程喜霖 2000, pp. 70-71 ;

<写>『図文』4, p. 295) に、以下のように見えていることに注目される。

(前 略)

- 171 岸頭府界都遊弈所 状上州
- 172 興胡史計思 作人史胡煞 羊貳伯口 牛陸頭 別奏石阿六 作人
羅伏解 驢兩頭
- 173 右件羊牛等、今日從白水路来、今随状送者。
- 174 史計思作人安阿達支
- 175 右件作人過所有名、點身不到者。
- 176 牛壹頭 馬壹疋
- 177 右件牛馬見在、過所上有牒、今随状送者。
- 178 以前得遊弈主帥張德質状稱、件状如前者。史計思等既是興胡、
- 179 差遊弈主帥張德質領送州、聽裁者。謹録上。
- 180 牒 件 状 如 前。謹 牒。
- 181 開元廿一年二月六日 典何承仙牒。
- (左果毅都尉劉敬)
- 182 遊弈都巡官・宣節校尉・前右果毅・要籍攝□□□□□□元

(後 略)

(和訳)

(交河県) 岸頭府管内の都遊弈所が、状をもって(西)州に申し上げます。

興胡の史計思 作人の史胡煞 羊貳伯口 牛陸頭 別奏の石阿六 作人の羅伏解 驢
兩頭

右、件の羊牛等は、(遊弈主帥の張德質の状に)「今日、白水路より来ましたので、
今、状とともに送致いたします」とあります。

史計思作人安阿達支

右、件の作人は、(遊弈主帥の張德質の状に)「過所にその名があるものの、點身し
たところ(ここには)到っていません」とあります。

牛壹頭 馬壹疋

右、件の牛馬は、(遊弈主帥の張德質の状に)「現にいるものの、過所には載せてい
ない余分の家畜です。今、状とともに送致いたします」とあります。

(遊弈都巡官の劉敬元の判、すなわち)「前に掲げたものは、遊弈主帥の張德質の状
を得るに、『件の状は、前の如し』とあります。史計思等は、興胡であるからには、
遊弈主帥の張德質を使わして、(これらを)連行して(西)州に送致させます。どうかご

裁可のほどを」。謹んで録して申し上げます。

牒をもって申し上げます。件の状は、前の如くです。謹しんで申し上げます。

開元廿一年二月六日、典の何承仙が申し上げます。

遊弈都巡官・宣節校尉・前右果毅・要籍・攝左果毅都尉の劉敬元

本文書は、交河県の岸頭府管内に置かれていた都遊弈所より、西州都督府に上した状である。本状は最初の「事書き」部分には、興胡（外来ソグド人）の史計思と別奏となっていたソグド人の石阿六がともに挙げられており、その内容から、彼らは天山北方より「白水路」¹²に沿って西州府に入ろうとしたものの、その途次、遊弈主帥の張徳質に捕獲されて、岸頭府管内の都遊弈所に送られてきたことがわかる。このことから、ソグド人の別奏が、興胡の史計思と一緒に移動していたこと、つまり天山東部の境域地帯においてともにキャラヴァン隊を組んで活動していた様相がうかがえよう。[Cf. 荒川 2010, pp.366-370]。

またトゥルファン（西州）の「市」において、ソグド人の女奴隷を売買するにあたり、保証人（保人）として瀚海軍（北庭）の別奏と行客三人が関与している〔唐開元二十（732）年薛十五娘買婢市券〕73TAM509:8/4-3(a), 『図文』4, pp.266-267〕のも、軍官に仕える別奏というものの活動の一端を示している。

唐の西北縁辺における交易活動が、軍鎮だけでなく、軍官本人や彼らが雇った「作人」および彼らの手足となって各地に派遣された「別奏・僱人」を通じて、活発に展開されていたことがうかがえるが、ソグド人は、こうした軍鎮の官兵・別奏などに就いていたのである。さらには別稿において論じたように、彼らは「典」に就任し、「使」とともに遠隔地に公的に移動する機会を頻繁に得ていた[荒川 2011]。こうした移動の機会が、絶好の交易チャンスでもあったことは贅言を要さない。ソグド人は、興胡や百姓としてだけでなく、軍・官双方にわたる様々な立場を利用して、西北境域における交易活動を展開していたのである。

おわりに一敦煌オアシスはローカル化したか？

以上に検討してきたように、唐代の敦煌オアシスは、決してキャラヴァン隊があまり寄りつかない寂れたオアシスと化したわけではないことは明らかである。大規模な軍鎮が常駐するにともない、その軍糧・飼料を支えるための屯田が大規模に開かれ、その結果、河西・中央アジア地域の特定のオアシスに、穀倉オアシスとも呼

¹² 白水路とは、『西州図経』（P. 2009）に見える白水澗道のことと見られ、現在のウルムチからトゥルファンに通ずるルートを指す。Cf. 松田 1970, pp. 112-113; 敵耕望 1985, p. 602; Pelliot 2002, pp. 81-87.

べる豊富な穀物糧を誇る生産拠点が形成されていったのである。そして、敦煌オアシスのような屯田が無い、もしくは屯田規模の小さなオアシスに駐留する軍鎮は、唐内地から各軍鎮に定期的に流れ込む大量の資金（帛練）を元手にして、行客（兵客）・百姓たちと提携して輸送（キャラヴァン）隊を派遣し、穀倉オアシスから穀物を買い上げて運搬させていた。その他、現地調達に必要な物資についても、生産地と軍鎮の間を多くの輸送隊が往来していたと見られる。その結果、軍需に起因する新たな交易網の形成が、密に展開していたと見て良い。

また軍鎮だけでなく、個々の将兵単位で交易活動を自己展開していたことは、既に見た通りである¹³。もちろん、こうした軍事機関や軍事関係者だけでなく、唐代の敦煌には諸国首領の使節（進奉使）が交易目的で滞在したり〔前掲「河西節度使判集」の「判諸国首領停粮」、『籍帳』p.495〕、ソグド商人が交易活動を展開したりしていた〔荒川 2010, pp.438-443〕。ただ唐帝国の成立により、河西・中央アジアの各オアシスに唐の軍鎮が大規模に配置されるなか、多くのソグド人が興胡や百姓としてだけでなく、軍鎮の将兵・別奏や、各地に遣わされる典となり、それぞれの立場で交易活動を展開している状況は見逃せない。

唐の時代、敦煌に限らず西北境域における一般の状況として、軍鎮が駐留するなか、莫大な帛練の流通とともに、駐留軍や将兵らによる交易が活性化していったことが予想される。例えば、時代は9世紀以降のもの、『会昌一品集』巻13「論太原及振武軍鎮及退渾・党項等部落互市牛馬駱駝等状」には、馬の代価として唐の絹が大量に「塞上」に流れたことが、現地の軍人たちと諸蕃の部落との旺盛な交易活動を誘発していた状況が伝えられている¹⁴。

唐の西北軍事支配のもと、敦煌オアシスは決してローカル化したわけではなく、帝国の軍鎮が常駐する最前線の都市として、軍需景気に牽引されるかたちで前代にも増して経済的に活気づいていたのである。

【文献略号】

『斯坦因』＝陳国燦『斯坦因所獲吐魯番文書研究』武漢大学大学出版社, 1994.

『釈録』＝唐耕捲・陸宏基（編）『敦煌社会経済文献真蹟積録』1-5, 全国図書館文献縮微複製中心・古佚小説会, 1986-1990.

¹³ 敦煌の軍兵による南山との絹馬交易[S.11456C・D]なども、そうした例の一つとして挙げられよう。

¹⁴ 【原文】右、縁回鶻新得馬価絹、訪問塞上軍人及諸蕃部落、苟利貨財、不惜駱馬、必恐競為互市、招誘外蕃。豈惟資助虜兵、實亦減耗辺備。望詔劉灰・忠順・義忠・守志等切加鈐鍵。如有違犯、並按軍令、馬及互市物並納官。如有人糾告、便以所得物充賞。また境域に駐留する軍鎮の将兵（辺将）の利殖活動については、丸橋 2006, p.178 を参照。

- 『集成』＝龍谷大学仏教文化研究所（編）・小田義久責任編集『大谷文書集成』1-3, 法蔵館, 1984・1990・2003.
- 『新出』＝柳洪亮『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社, 1997.
- 『図文』＝唐長孺（主編）, 中国文物研究所・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系（編）『吐魯番出土文書』1-4, 文物出版社, 1992-1996.
- 『籍帳』＝池田温『中国古代籍帳研究——概観・録文——』東京大学出版会, 1979.
- 『増集』＝黄文弼『増訂本高昌磚集』（『考古学特刊』2）中国科学院, 1951.
- 『中亞』＝『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文文献（非佛經部分）』2, 上海辞書出版社, 2005.
- 『文書』＝国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系（編）『吐魯番出土文書』1-10, 文物出版社, 1981-1991.
- TTD = Yamamoto, T. et al., *Tun-huang and Turfan Documents concerning social and economic history I - IV & supplements*, The Toyo Bunko, 1978-1987・2001.

【参考文献】

- 荒川正晴 1982 「唐代敦煌に於ける糴買についてーペリオ 3348 号文書を中心としてー」『早稲田大学文学研究科紀要』別冊 8, pp. 191-200.
- 1989 「唐の中央アジア支配と墨離の吐谷渾（下）ー主に墨離軍の性格をめぐってー」『史滴』10, pp. 19-42.
- 2010 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会.
- 2011 「唐代天山東部州府の典とソグド人」森安孝夫編『ソグドからウイグルへ』汲古書院（出版予定）.
- 池田 温 1968 「中国古代物価の一考察ー天宝元年交河郡市估案断片を中心としてー（一）・（二）」『史学雑誌』77-1, pp. 1-45; 77-2, pp. 45-64.
- 1980 「敦煌の流通経済」『講座敦煌 3 敦煌の社会』大東出版社, pp. 297-343（再録：同『敦煌文書の世界』名著刊行会, 2003, pp. 119-181）.
- 菊池英夫 1980 「隋・唐王朝支配期の河西と敦煌」榎一雄（編）『講座敦煌 2 敦煌の歴史』大東出版社, pp. 99-194.
- 佐藤武敏 1968 『中国古代絹織物史研究』下, 風間書房.
- 内藤乾吉 1963 「西域発見唐代官文書の研究」『中国法制史考證』有斐閣, pp.223-345.
- 那波利貞 1952 「唐天宝時代の河西道辺防軍に関する経済史料」『京都大学文学部研究紀要』1, pp.1-130.
- 日野開三郎 1982 「唐代の閉糴と禁銭」『日野開三郎 東洋史学論集』5（唐・五代の貨幣と金融）、三一書房、pp.262-284.

- 松田寿男 1970 『古代天山の歴史地理学的研究 増補版』早稻田大学出版部。
- 丸橋充拓 2006 『唐代北辺財政の研究』岩波書店。
- 程喜霖 2000 『唐代過所研究』中華書局。
- 郭鋒 1993 『斯坦因第三次中亞探險所獲甘肅新疆出土漢文文書 —— 未經馬斯伯樂刊布的部分 —— 』甘肅人民出版社。
- 齊陳駿 2005 「隋唐西北的屯田」『枳室史稿』甘肅文化出版社, pp.182-240 (原載:『河西史研究』甘肅教育出版社, 1989)。
- 嚴耕望 1985 『唐代交通圖考』2 (中央研究院歷史語言研究所專刊之八三)、台灣商務印書館。
- 李錦繡 1995 『唐代財政史稿』(上) 第 1-3 分冊, 北京大学出版社。
- 馬國榮 1990 「唐代西域的軍屯」『新疆社会科学』1990-2, pp.112-119。
- 姜伯勤 1989 「敦煌新疆文書所記的唐代“行客”」國家文物局胡文獻研究室(編)『出土文獻研究續集』文物出版社, 1989, pp. 277-290。
- 楊際平 1992 「天寶四載河西豆盧軍和糴會計文書研究」『中国社会經濟史研究』1992-3, pp. 19-32。
- 廬向前 1990 「從敦煌吐魯番出土的幾件文書看唐前期和糴的一些特点」北京大学中國中古史研究中心(編)『敦煌吐魯番文獻研究論集』5, 北京大学出版社, pp.307-337。
- 王永興 1990 中國敦煌吐魯番學會(編)「伯三三四八背文書研究」『敦煌吐魯番學研究論文集』漢語大詞典出版社, pp.157-173。
- Trombert, É. 2000 *Les Manuscrits Chinois de Koutcha : fonds Pelliot de la Bibliothèque nationale de France*, avec la collaboration de Ikeda On et Zhang Guangda, Paris, Institut des Hautes Études Chinoises du Collège de France.
- Pelliot, P. 2002 *Les Routes de la Région de Turfan sous les T'ang suivi de l'histoire et la Géographie Anciennes de l'Asie Centrale dans Innermost Asia*. Paris, Institut des Hautes Études Chinoises du Collège de France.

「唐天宝九(750)載八月～九月、敦煌郡百姓和糴納入一覽表」

百姓名	八月廿八日	九月四日	五日	八日	九日	十一日	十二日	十四日	十七日	十八日
徐仁素	粟 22 石									
徐孝順	粟 14 石									
張思貞	粟 9 石 3 斗									
彭仁俊	粟 8 石		粟 5 斗							
王元曜	粟 14 石		粟 1 石 5 斗							
王懷玉	粟 6 石		粟 2 石 3 升 5 合							
張懷感	粟 4 石 6 斗									
張阿樹	粟 3 石 1 斗									
張文盛	粟 4 石 3 斗	粟 4 斗								
宋嗣嘉	粟 23 石 2 斗 3 升									
張懷欽	粟 4 石 7 斗									
張君格	粟 4 石									
索思亮	粟 4 石	粟 1 斗								
薛崇太	粟 4 石	粟 7 斗								
宋希盛		粟 24 石				粟 8 石				
梁思貞		粟 22 石				粟 10 石				
曹思礼		粟 4 石 8 斗								
張祗闕		粟 1 石 2 斗/2 石								
曹神忠		粟 15 石								
曹光仙		粟 5 石								粟 16 石
李朝宰		粟 16 石								
宋買德		粟 3 石 2 斗								
索举		粟 20 石/2 石								
張思賓		粟 14 石/1 石 8 斗		粟 2 斗						
翟洪慙		粟 16 石/24 石/8 石			床 18 石					
張力		粟 18 石/18 石							粟 10 石	
張懷忠		粟 15 石 8 斗								
張元俊		粟 22 石/2 石 2 斗								
張奉璋		粟 24 石								

令狐思仁		粟 26 石	床 6 石 6 斗						
汜崇璋		粟 40 石							
曹福超		粟 38 石/8 石							
張思太		粟 4 石/10 石 /1 石 6 斗							
宋光嗣		粟 16 石							
康攬延		粟 8 石							
宋元暉		粟 6 石							
索君爽		粟 2 斗							
屈元亮		粟 8 石							
董義忠		粟 9 石 5 斗							
張慶々		粟 1 斗/2 石 /1 石							
雷仁幹		粟 16 石							
張孝素		粟 6 石/4 石							
張崇真		粟 8 石							
宋懷慶		粟 8 石							
陰庭誠		粟 18 石							
汜履光		粟 8 石							
李光庭		粟 10 石							
董大暢		粟 4 石 8 斗							
賀元昂		粟 3 石 2 斗							
宋師々		粟 16 石							
李元濟		粟 2 石/4 石							
石懷忠		粟 4 石/4 石							
索元瑩		粟 8 石							
索元晃		粟 22 石/20 石	床 21 石						
王思欽		粟 10 石	床 1 斗 9 升					床 6 石	
康令欽		粟 2 石							
郭承嗣		粟 4 石/8 斗							
任法連		粟 4 石			粟 8 斗 3 升				
孫思暢		粟 7 石 9 斗							
王貞古		粟 1 斗/36 石 /2 石						床 11 石	
宋仁珪		粟 12 石			粟 1 石 1 斗 7 升	粟 24 石			
宋仙鶴		粟 3 石 2 斗							
孟奉璋		粟 15 石							

令狐英奇		粟 36 石/18 石								
汜崇慶		粟 40 石/8 石								
宋庭玉		粟 8 石					粟 20 石			
康忠孝		粟 16 石								
翟洪俊		粟 24 石								
宋旭斌		粟 7 石 9 斗/1 斗								
翟洪慶		粟 8 石								
支忠義		粟 8 石								
支忠臣		粟 6 石/2 石								
張嗣寶		粟 8 石/8 石								
劉大表		粟 42 石/2 石								
宋承業		粟 4 石/6 石 /2 石		粟 20 石						
張旭彥		粟 16 石/26 石								
姜庭芝		粟 4 石 8 斗								
王香子		粟 32 石								
王桃花		粟 1 石 6 斗/1 石 2 斗								
王元欽		粟 16 石								
李懷表		粟 2 石 4 斗								
張懷欽		粟 2 石								
馬楚琮		粟 2 石/1 石 2 斗								
王承慶		粟 4 石								
王元昭		粟 4 石								
馬大島		粟 4 石 8 斗								
宋外生		粟 4 石 8 斗								
任思礼		粟 4 石 8 斗								
張神楚		粟 2 石					粟 1 石 2 斗			
任郎々		粟 3 石 2 斗								
翟英俊			床 24 石 8 斗 4 升							
百姓名	八月廿八日	九月四日	九月五日	九月八日	九月九日	九月十一日	九月十二日	九月十四日	九月十七日	九月十八日
張大力			床 82 石 8 斗 1 升							

李朝璟			粟 40 石 1 斗 5 升 3 合							
王光興			粟 32 石 1 斗 3 升							
王慶餘			粟 8 石 2 升 2 合							
唐承晃			粟 62 石							
陰思諫			粟 58 石						床 28 石	
翟崇明			粟 10 石							
汜広志			粟 22 石					粟 4 石		
陰庭堅			粟 24 石			粟 5 斗 8 升				
汜日新			粟 10 石			粟 16 石	粟 4 斗 3 升			
安守礼				粟 24 石						
安沙庇				粟 3 石 8 斗						
齊欽礼				粟 16 石						
薛貞嗣				粟 2 石	粟 30 石					
張神芝				粟 16 石						
曹嘉礼				粟 8 石						
宋光瑒				粟 16 石						
王輔国				粟 32 石						
朱懷抱				粟 2 石 /22 石						
曹宝国				粟 30 石 /2 石						
閻承休				粟 24 石 /8 石 4 斗						
索崇嗣				粟 6 石/3 石 6 斗						
鄧仙巖				粟 8 石						
張遊礼				粟 6 石						
薛為宰				粟 20 石	粟 12 石					
令狐遷喬				粟 14 石				粟 22 石		
索重曜				粟 26 石	粟 32 石					
宋崇暉					粟 3 石 2 斗 2 升					
宋名愆					粟 24 石					
薛香々					粟 8 石					

薛大慶					粟 8 石					
薛懷璟					粟 2 石	粟 2 石/4 石				
索鶴拳					床 16 石	粟 4 石/2 石				
馬崇珍						粟 8 石				
曹英峻						粟 16 石				
張守業						粟 4 石		粟 10 石		
張忠璟						粟 16 石				
令狐楚琬						粟 44 石				
白論子						粟 20 石				
陰潛鳳						粟 20 石/4 石	粟 5 斗 8 升			
張円明						粟 30 石/10 石				
安辺庭						粟 24 石	粟 2 斗			
索秀珍						粟 8 石/24 石	粟 4 斗 3 升			
陰履猷						粟 24 石	粟 3 斗 6 升			
王崇振						粟 4 石				
索元振						粟 16 石				
薛明巖						粟 16 石				
薛明鶯						粟 20 石				
索大力						粟 20 石				
陰履憲						粟 2 斗 2 升				
□□□							粟 38 石			
賀光琬							粟 24 石			
唐思貞							粟 52 石		粟 12 石	
宋思忠							粟 4 石			
汜頴璿							粟 34 石			
李元欽								床 24 石/ 粟 9 石 1 斗/粟 5 斗		
曹崇福								床 26 石		
陰声振								床 25 石		
薛慎詮								床 10 石		
唐志貞								粟 10 石		
李大忠								粟 8 石		

白大亮								粟 4 斗/ 粟 12 石		
常克姆								粟 2 石		
令狐元慶								粟 50 石		
令狐珣								粟 20 石		
汜庶幾								粟 52 石		
唐承晃									床 4 石	
陰休謙									床 30 石	
張玄爽									床 32 石/ 粟 20 石	粟 14 石
宋仁亮									粟 8 石	
安守德									粟 8 石	
張元俊									粟 8 石	
張仁祚									粟 16 石	
張嘉賓									粟 32 石	
郭仁福									粟 20 石	
張嘉珍									粟 26 石	
令狐仙童									粟 1 石	
常堯姆									粟 1 石	
劉希顏									粟 32 石	
汜宣感									粟 6 石	
令狐晉										粟 10 石